聞かせてください 神さまと出会った時のこと
～エマオへの道で～
大阪教区で働く司祭・修道者ご自身の体験をきく

■第1回　竹延真治神父（クラレチアン修道会）■

大阪河内の養豚場経営の家に生まれる。母は熱心なカトリック。父は無神論者。そんな環境の中、神の存在について揺れ動いて育ちました。

大学の獣医学科を卒業後、立派な経営者となるようにと、父の勧めでアメリカへ農業研修に行くことに。ミズーリ州の農家に配属され、養豚部門を一人で任されました。自分の知識と経験を活かし、最初はとても喜ばれましたが、20年ぶりの熱波により、豚がバタバタ死んでしまった。ボスとも喧嘩し、農場をクビになりました。自分のプライドが傷つけられる恥ずかしい経験でした。

次の派遣先が決まるまで居候させてもらった農場に日本人研修生が置き残した聖書があり、久々に読んでみると、どこを読んでみても、「ここに書かれてあることは何一つ間違っていない」と感じ、涙があふれました。初めて大きな挫折を体験したとき、聖書の言葉が響いたのです。

日本にいると、雑踏で自分をごまかすことができるし、山に囲まれ安心する。地平線まで見渡せるアメリカの大平原にいると、大地に足がついていない自分に気づき、言いようもない思いに駆られました。ある日、トウモロコシ畑を一人で歩いていると、突然「確かに神さまはおられる」という気持ちが沸き起こった。それが僕の神さまとの出会いです。

研修期間中、ネブラスカ州の大学で3か月学ぶ機会があり、共に退役士官のご夫婦と娘さんと3人家族のお宅にホームステイしました。そこで生まれてはじめて、「自分はここにいてもいいんだ」という体験をしました。老夫婦は、何も特別な人ではないのに、ただ、その家の中にいると心から安心できたのです。今までは、「この学校に合格したら息子として認めてやる」「日曜日ごとに教会に行ったら信者に加えてあげる」と条件付きでしか自分が認められていないことに気づいたのです。でも、その家庭からは「あなたがそこにいてくれることがうれしい。あなたの過去や、やってきたことではなく、今のありのままのあなたが大好きだ」と、無条件の神さまの愛に気づかせてもらった。

私が努力をし、何か成し遂げたときではなく、むしろ一番ひどい状態のとき、神さまは私を一番愛しておられる。弱さだけではなく、罪をおかしたときでさえも、神さまは私を抱きしめようとしてくださる。これがキリスト教のメッセージの中心だと思う。これを伝えねばならないという思いで神父になりました。伝えきれていませんが……。

「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない」（知恵の書11・24）

【10月のお話より抜粋。サクラ ファミリアでふた月に1回開催中！】

「カテキズムの学び」

第38回「隣人の妻を欲してはならない」「隣人の財産を欲してはならない」

十戒の解説シリーズは10月26日に最終回を迎え、第９と第10の掟を学びました。講座の様子は上のQRコードから視聴できます。

この二つの掟は両方とも心の中の欲望についてで、その欲望を実行に移すことが第６と第７の掟で禁じられています。実行に至らないように、まず欲望と戦うことが示されています。

> 聖パウロは、「肉」が「霊」に逆らうことを欲望と呼んでいます。それは最初の罪の不従順から来るもので、人間の倫理的機能を乱し、それ自体罪ではないにしても、人間を罪に陥りやすくさせます。……人間とは、もともと霊と肉とが一体となったものなので、人間の中にはある種の緊張があり、「霊」が求めるものと「肉」が求めるものとの間である種の戦いが生じます。（2515-2516番）

下線部にあるように欲望を感じることが罪であるわけではなく、それに同意することが罪になるということです。聖人たちもまったく欲望がなくなったわけではありません。欲望と戦って勝利をおさめたのが聖人です。私たちも死ぬまで戦う必要があります。この戦いに勝つことによって、私たちは「心の清い人」になることができ、新たな見方ができるのだとカテキズムは教えます。

> 心の清さを持っていれば、わたしたちはすでにこの世にいるときから、神の立場でものごとを眺め、他人を「隣人」として受け入れることができるようにしていただけるし、自分や他人のからだが聖霊の神殿、神の美の顕現だと認めることができるようにしていただけるのです。（2519番）

質疑応答では「どこまでが欲望で、どこまでが悪魔の誘惑なのか」という質問がありました。確かに悪魔は執拗に人を誘惑しますから、主の祈りで「悪からお救いください」と祈り求めます。アダムとエバが誘惑に負けてしまったのは、蛇から話しかけられて対話に入ってしまったからだと言われます。自分の欲望、あるいは悪魔からの誘惑の最初の瞬間にきっぱりとそれを拒むことによって、心の清さを守っていくことができるでしょう。

（文　酒井俊弘補佐司教）

訃報

Sr浅田シズカ（大阪聖ヨゼフ宣教修道女会）は10月25日、慢性心不全のため介護老人保健施設 ニューライフガラシアにて帰天。93歳。長崎県出身。奉献生活73年。

「司祭のためにささげてほしい」という創立者であった当時の大阪教区長田口芳五郎司教の夢に共感して、修道会創立に協力した。ガラスの破片、石の埋まる草だらけの戦後の荒れ地を開墾して修道院を建てるところから始まり、創立70数年の歩みを共にし、ただ一筋に司教、司祭、神学生のために祈り、奉仕することを喜びとした。深い信仰と大きな希望を持って、聖ヨゼフの精神で謙虚にコツコツ働き生涯を全うした。

◆　◆

Sr藤井妙子（聖母被昇天修道会）は、10月18日、老衰のためニューライフガラシアにて帰天。90歳。大阪府大阪市出身。奉献生活66年。

1952年に来日した聖母被昇天修道会の最初の志願者であった。その後、ベルギーで修練し、初誓願を立て日本に帰国。洲本の修道院創立のメンバーとして淡路島に派遣され、丸亀修道院では院長、箕面の聖母被昇天学院では中学校高等学校の校長も務めた。また、西成修道院では夜回りや炊き出しにも奉仕した。使徒職を退いてもいつも教会や学院の現在に興味関心を持ち、祈っていた。

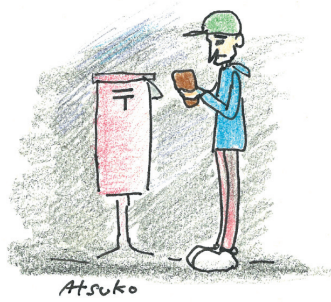
大阪教区のカトリック病院
ガラシア病院
特徴的な医療
ホスピス（緩和ケア）
リハビリ・神経内科
肝臓内科・循環器内科
医療法人ガラシア会
理事長　前田万葉 大司教
チャプレン　松本信愛 神父
〒562-8567
箕面市粟生間谷西 6-14-1
☎ 072-729-2345
医療法人ガラシア会

『生きる』―難民移住者

落としもの

私が「日本て何て良い社会なの」と嬉しくなるとき、それは落とし物にまつわる出来事にあったときです。ミサ道具一式やスマホを置き忘れた司祭も身近にいましたが、私の経験では、かなりの確率で落とし物は手元に戻ります。

財布を落とした、大切な書類を電車に忘れた、と悲壮な形相で外国人たちがシナピスによくやってきます。私たちが警察や鉄道会社に連絡を取ってみると、誰かがちゃんと届けてくれていたと報せが入る率がとても高いのです。外国人は「何て素晴らしい国だ」と天を仰ぎ、私もつられて天を仰ぎます。



アレックスさんは夜中に財布を拾いました。開けると写真付きの身分証やクレジットカードと6万円が入っていました。彼はそれを家に持ち帰り、現金を抜き取り、私の名刺と自分の名前を財布に貼り付けて、駅前のポストに投函しました。現金はシナピスに持ってきました。何やってんだ、と事情を聴くと「夜中だったからシナピスに電話するのは迷惑。公共のポストなら安全だろうと思いつき、連絡先がわかるようにシナピスの名刺を貼って投函した。現金だけは邪（よこしま）な人間に盗られてはいけないから抜き取って教会に持ってきた」。

私はアレックスさんが投函したポストへ行き、そこから郵便局を訪ねたところ「名刺などなかったが既に警察に届けた」と言われ、私は6万円を届けに所轄の警察署へ行きました。落とし物の窓口にいると背後から複数の警察官に取り囲まれ、警察手帳を提示され「窃盗容疑につき上階へ」と私は連行されました。確かにアレックスさんの行為は現金を抜き取った時点で泥棒でした。「事件性なし。ブツは落とし主へ」と判断されるまで2時間以上かかりました。私が代理で対応してよかったと痛感しました。

捕まったときに「違法とは知らなかった」は通用しません。今回の顛末（てんまつ）を聞いたある警察官が「落とし物の対処法をペルシャ語で教えますよ」と提案してくれましたので近々講座を一席設けようと考えています。

（文 シナピス事務局　ビスカルド篤子）